

箱崎 50

— 箱崎遺跡第 74 次・75 次調査報告 —

2017

福岡市教育委員会

箱崎 50

— 箱崎遺跡第 74 次・75 次調査報告 —



遺跡略号 HKZ-74・75
調査番号 1502・1506

2017

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古来より大陸文化の門戸としての役割を担い発展してきた歴史をもち、地中には多くの文化財が分布しています。本市では、これら文化財の保護に努めているところであります。各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財に関しては、発掘調査を行い、記録保存を行うことで後世に残しています。

本書は東区馬出5丁目に所在する箱崎遺跡の第74次調査、および東区箱崎1丁目に所在する箱崎遺跡第75次調査の報告書です。箱崎遺跡は筥崎宮の周辺に栄えた古代末から中世にかけての都市遺跡で、当時の日本最大級の貿易都市博多遺跡群を補完する役割をもっていたとも考えられています。今回の調査では当該期の遺構、遺物を多く確認しました。

本調査の成果が文化財保護への認識と理解を深める一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に際してご理解とご協力をいただきました土地所有者様をはじめとした関係者の方々に、心から感謝の意を表します。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例言

1. 本書は、福岡市教育委員会が平成27年4月6日から4月21日まで東区馬出5丁目で実施した箱崎遺跡第74次調査、および平成27年5月18日から7月4日まで東区箱崎1丁目で実施した箱崎75次調査の発掘調査報告書である。発掘調査および整理報告書の作成は国庫補助金事業として実施した。

2. 遺構は、掘立柱建物をSB、井戸をSE、土坑をSKとそれぞれ記号化し、すべての遺構を01から通して番号を付した。柱穴はSPと記号化し上記遺構とは別に01から通し番号を付した。なお整理の段階で土坑を柱穴に変更したものなどがある。そのため遺構番号に欠番がある。

3. 本書で使用した方位は、すべて国土地理院（世界測地系）である。

4. 本書に掲載した遺構実測図、遺構写真撮影、遺物実測図、遺物写真撮影、製図、執筆、編集は中尾による。なお、整理作業にかかる各作業については早田有輝子（福岡女子大学）の協力を得た。

5. 本書に掲載する遺物の分類に関しては、以下の文献を参照した。

山本信夫 1990『統計上の土器 - 歴史時代土師器の編年研究によせて -』

『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論集刊行会

太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊XV - 陶磁器分類編 -』太宰府市の文化財第49集

森本朝子・片山まひ 2000『博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案 - 生産地編年を視座として -』

『博多研究会誌』第8号

6. 本書にかかわる記録と遺物は、整理後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、管理・活用する。

調査番号	1502	遺跡略号	HKZ-74
調査地	東区馬出5丁目108番1	分布地図図幅名	箱崎34
申請地面積	80m ²	開発面積	50m ²
調査実施面積	37m ²	事前審査番号	26-2-1038
調査期間	150406～150421		

調査番号	1506	遺跡略号	HKZ-75
調査地	東区箱崎1丁目2686番1, 2686番3, 2686番4, 2706番1, 2706番6	分布地図図幅名	箱崎34
申請地面積	487m ²	開発面積	136m ²
調査実施面積	136m ²	事前審査番号	27-2-3
調査期間	150518～150704		

本文目次

I	はじめに	1
1.	第 74 次調査の調査に至る経緯・調査の組織	1
2.	第 75 次調査の調査に至る経緯・調査の組織	2
3.	遺跡の立地と歴史的環境	3
II	第 74 次調査の記録	7
1.	調査の概要	7
2.	遺構と遺物 土坑・その他の出土遺物	9
3.	小結	12
III	第 75 次調査の記録	14
1.	調査の概要	14
2.	遺構と遺物 掘立柱建物・井戸・土坑・その他の出土遺物	16
3.	小結	26
IV	結語	27

挿図目次

Fig1	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	5
Fig2	箱崎崎遺跡各調査地点位置図 (1/6,000)	6
Fig3	第74次調査地点位置図 (1/1,000)	7
Fig4	第74次調査遺構配置図および基本層序 (1/50)	8
Fig5	SK01・02・03実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig6	SK04・05実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	11
Fig7	その他の出土遺物実測図 (1/3)	13
Fig8	第75次調査地点位置図 (1/1,000)	14
Fig9	第75次調査遺構配置図および基本層序 (1/100)	15
Fig10	SB11実測図 (1/60)	16
Fig11	SE09・10実測図 (1/40)	17
Fig12	SE09出土遺物実測図 (1/3)	18
Fig13	SK01実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	19
Fig14	SK02実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	20
Fig15	SK04・06実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	21
Fig16	SK07実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	22
Fig17	SK08実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	23
Fig18	SK12実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	24
Fig19	その他の出土遺物実測図 (1/3)	25

図版目次

PL1	PL2	PL3
(1) 第74次調査1区全景(北東から)	(1) 第75次調査1区1面全景(南東から)	(1) 第75次SK08遺物出土状況(西から)
(2) 第74次調査2区全景(北東から)	(2) 第75次調査1区2面全景(南東から)	(2) 第75次1面下硬化面検出状況(南西から)
(3) 第74次調査3区全景(北東から)	(3) 第75次調査2区1面全景(北東から)	(3) 第75次SE09出土遺物(70)
(4) 第74次調査4区全景(北東から)	(4) 第75次調査2区2面全景(北東から)	(4) 第75次SE09出土遺物(77)
(5) 第74次SK01出土遺物(7)	(5) 第75次SK01遺物出土状況(南東から)	(5) 第75次SK07出土遺物(133)
(6) 第74次SK02出土遺物(13)	(6) 第75次SK02遺物出土状況(北西から)	(6) 第75次1面下包含層出土遺物(190)
(7) 第74次SK04出土遺物(22)	(7) 第75次SK06遺物出土状況(北から)	
(8) 第74次SK05出土遺物(25)	(8) 第75次SK07遺物出土状況(南東から)	

I はじめに

1. 第 74 次調査の調査に至る経緯・調査の組織

調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、福岡市東区馬出 5 丁目 108 番 1 における個人住宅の建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 27 年 3 月 2 日付で受理した。

これを受け埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課）事前審査係は、照会地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれていること、確認調査が実施され地表下 120cm で遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成 27 年 3 月 31 日付で事前協議確認書を取り交わし、同年 4 月 6 日から発掘調査を、翌年平成 28 年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

調査の組織

調査委託 個人

調査主体 福岡市教育委員会

発掘調査 - 平成 27 年度 整理報告 - 平成 28 年度

調査総括	文化財部埋蔵文化財調査課（現・埋蔵文化財課）	課長	常松 幹雄
		同課調査第 2 係長	榎本 義嗣（平成 27 年度）
			加藤 隆也（平成 28 年度）
調査庶務	埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課）管理係	係長	大塚 紀宜
		同係	横田 忍
事前審査	埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課）事前審査係	係長	佐藤 一郎
		同係主任文化財主事	池田 祐司
		同係文化財主事	板倉 有大（平成 27 年度）
		同係文化財主事	清金 良太（平成 28 年度）

調査担当 埋蔵文化財調査課（現・埋蔵文化財課） 文化財主事 中尾 祐太

発掘作業 村山巳代子 中村桂子 梁野孝子 原野容子

整理作業 国武真理子

2. 第 75 次調査の調査に至る経緯・調査の組織

調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、福岡市東区箱崎 1 丁目 2686 番 1、2686 番 3、2686 番 4、2706 番 1、2706 番 6 における個人住宅の建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 27 年 4 月 1 日付で受理した。

これを受けて埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課）事前審査係は、照会地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれていること、確認調査が実施され地表下 110cm で遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成 27 年 5 月 11 日付で事前協議確認書を取り交わし、同年 5 月 18 日から発掘調査を、翌年平成 28 年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

調査の組織

調査委託 個人

調査主体 福岡市教育委員会

発掘調査 - 平成 27 年度 整理報告 - 平成 28 年度

調査総括	文化財部埋蔵文化財調査課（現・埋蔵文化財課）	課長	常松 幹雄
	同課調査第 2 係長	榎本 義嗣（平成 27 年度）	
		加藤 隆也（平成 28 年度）	
調査庶務	埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課）管理係	係長	大塙 紀宣
	同係	横田 忍	
事前審査	埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課）事前審査係	係長	佐藤 一郎
	同係主任文化財主事	池田 祐司	
	同係文化財主事	板倉 有大（平成 27 年度）	
	同係文化財主事	清金 良太（平成 28 年度）	

調査担当 埋蔵文化財調査課（現・埋蔵文化財課） 文化財主事 中尾 祐太

発掘作業 唐島栄子 村山巳代子 中村桂子 栗野孝子 安東昌信 上野照明 遠竹卓馬 原野容子
阿部洪太郎

整理作業 国武真理子

3. 遺跡の立地と歴史的環境

福岡市の北を限る博多湾沿岸には、箱崎砂層と呼称される新砂丘砂層が堆積している。本砂丘は東区箱崎から室見川河口付近までのびており、形成時期は自然科学的におそくとも縄文時代晚期までと考えられている。砂丘は鞍部や旧河川などに分断されつつ微高地を形成しており、微高地上には、姪浜遺跡、西新遺跡、藤崎遺跡、博多遺跡群、堅船遺跡、古塚本町遺跡などが点在している。箱崎遺跡もこの砂丘上に形成された遺跡のひとつで、砂丘の最北に位置している。遺跡の範囲は東区箱崎～馬出にかけての南北 1000m 以上、東西約 500m の範囲に展開する。詳細な立地環境は Fig1 に示すとおり、遺跡東側は現在と比較して地形が大きく異なっており、現在の宇美川の河口付近まで入り江が大きく湾入しており、これにより遺跡周辺の砂丘は半島状の地形をなしていたと考えられている。この旧地形は箱崎遺跡の出現、発展に大きく寄与したものと推定される。

Fig2 は、これまでに実施された発掘調査および確認調査で明らかになった砂丘面のレベルをもとに等高線を推定したもので、2003 年以降使用されていた図をもとに、近年の調査結果を反映させたものである。遺跡の北東部で尾根線を分断する形で調査された 10 次調査地点では、調査区中央付近の標高 2.8m をピークとして、それぞれ約 2.6m 前後を測る調査区の東西端までゆるやかに下降する安定した高所が存在していたことが明らかとなっている。この砂丘は、現在の町割りに沿うかたちで、筥崎宮南東部の 2 次調査地点付近までのびる。なお、10 次調査北側付近が丘陵の北限とされつつ、さらに北に延びることが想定されていたが、近年の調査の結果、その可能性がさらに強くなった。この砂丘南側の 26 次調査 8 区から西にかけては鞍部を形成しており、深い谷地形であったと推定されているが、鞍部をはさんだ南には標高 3m 前後の安定した高所があり、砂丘は北側同様さらに南に延伸すると考えられる。遺跡の西限は標高 2m のライン付近、東限は現在の JR 鹿児島本線付近とそれぞれ考えられる。遺跡東限に関しては、確認調査の結果、水性の堆積物が確認され、上記の入り江による浸食によって崖面を形成していたものと考えられている。

本遺跡で出土した最も古い遺物は 6 次調査の縄文時代晚期～弥生時代前期の磨製石斧であるが、該期の遺構は確認されていない。他の調査地点においても刻目突堤文土器などが出土しているが、いずれも後世の遺構などから出土したもので、明確な遺構は存在しない。最も古い遺構が確認されるのは、弥生時代後期で、30 次調査 16 区では弥生時代後期初頭～前半の甕棺が検出されている。しかし、単体の出土であり、周囲で同時期の遺構は検出されていない。その他、やや時期が下る弥生時代後期中頃の土坑等が検出されており、該期の遺物も増加するが、やはり、住居などは確認されておらず散漫な状況といわざるをえない。

本格的な集落の形成期は古墳時代で、丘陵東側の緩斜面に位置する調査地点で該期の住居や墳墓が確認されている。各遺構の分布をみると、上述した鞍部の北側に住居が、南側に墳墓が集中する傾向がみられる。8 次調査では土坑から飯蛸壺が一括で出土している他、住居からも一定の飯蛸壺が出土しており、当時の湾岸集落の生業を考えるうえで興味深い例といえよう。

奈良時代になると集落の断絶が認められ、遺物もわずかに出土するのみである。その後再び生活遺構が確認されるのは、10 世紀代で、以降中世を通して発展する。遺跡範囲内に所在する筥崎宮の創建が延長元（923）年と時期的に符合することから、生活域の出現と発展の契機には筥崎宮が深く関係していると考えられる。

10 世紀～11 世紀前半にかけての遺構は筥崎宮の南東側に集中しており、2 次・22 次・26 次・

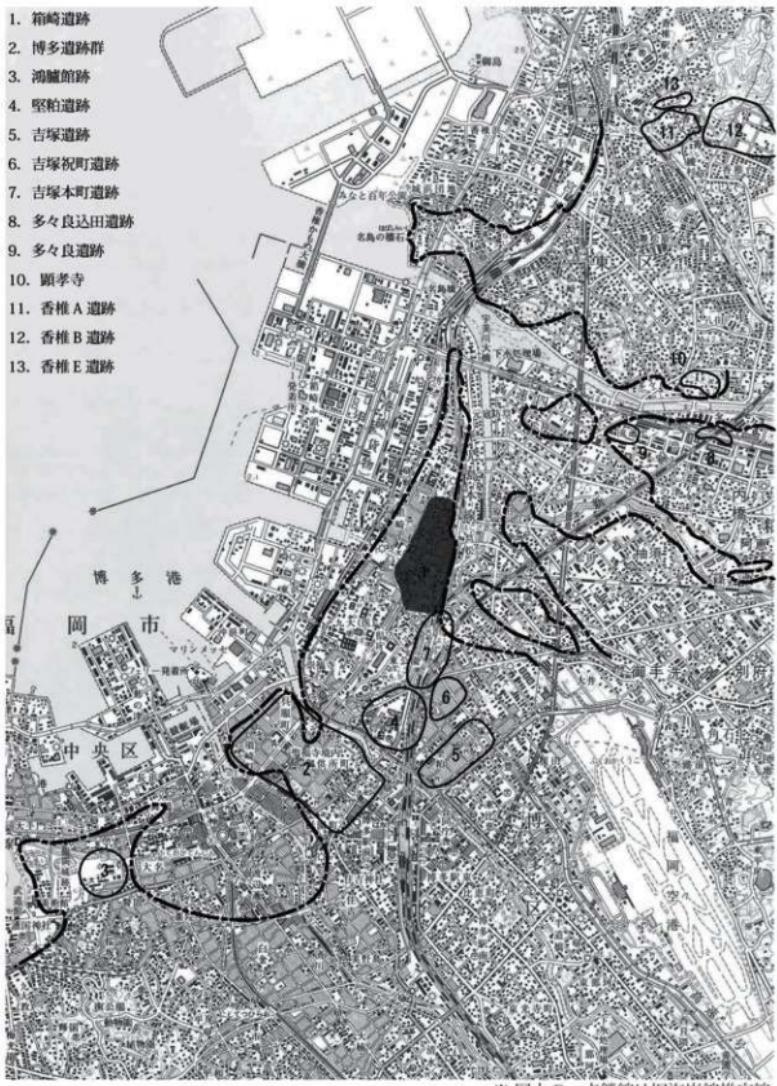
40次などの調査地点で該期の遺構が検出されている。10世紀前半は、遺物とわずかな遺構が中心となるが、10世紀後半になると生活遺構である井戸が検出されるようになり、11世紀前半にかけて同地点で遺構が増加する。出土遺物にはイスラム陶器や石帶巡方、越州窯系青磁碗などがあり、一般的な集落とは異なる様相が伺える。また、上記の遺物が出土する範囲と重複するかたちで瓦がある程度まとまって出土している。瓦は二次的に利用することも可能で、時期を特定するのは困難であるが、出土した瓦のなかには大宰府系、鴻臚館系の瓦が混入しており、当初の遺跡の性格を考えるひとつの有用な遺物であるといえよう。これらの遺物と上記の地形的側面から小規模な港湾機能も想定される。

以降、砂丘の発達も与し、生活遺構の範囲は徐々に拡大していく。11世紀後半～12世紀前半には、上記の生活域は継続しつつ、遺跡東側緩斜面を中心として遺構が検出される範囲が拡大するとされている。この時期前後の博多湾沿岸では、鴻臚館衰退に伴い博多遺跡群が貿易の中心地になることが既往の調査・研究で明らかになっている。この影響は箱崎遺跡にも表れており、この時期以降急増する井戸には中国商人との関係が考えられる桶を積極的に使用するようになる。また、墨書白磁を含む白磁も一定数出土しており、都市化の契機には上記の貿易体制の変革が深く関係しているものと想定される。その他の遺物としては、この時期前後の中期高麗青磁がまとまって出土する他、楠葉型瓦器碗に代表される畿内系土器も集中して出土することが明らかになっている。興味深いのは、これらの遺物の出土傾向がそれぞれ異なることである。ここで挙げた楠葉型瓦器碗は笠崎宮の北側に集中し、墨書陶器は遺跡中央やや北寄りで多く出土している。今後の調査の進展により、こうした遺物の分布傾向から構成集団の差を明らかにできる可能性もあるだろう。

12世紀中頃～13世紀は遺跡のひとつのピークで前代までの生活域は踏襲しつつ、遺跡西側緩斜面も積極的に利用するようになり、遺跡内のほぼ全域で遺構が確認されている。井戸に関してみると、前代までの各調査区における井戸の検出数は100m²あたり多くても2基程度であるが、本時期になると、多くの調査地点において100m²あたり2基以上の井戸が検出されており、3基以上検出されている地点も複数ある他、なかには100m²あたり5基以上が検出される調査地点も存在する。当然、極めて近い場所に同時期もしくは近い時期のものが複数基重複している例もあり、人口の集中および生活域の継続性を伺うことができる。この他、遺跡の北側に位置する10次調査地点や38次調査地点では、鋳型や羽口、ガラス坩堝などの生産関連遺物が出土しており、以上の傾向を総合的にみれば、該期の遺跡は都市としての性格を付与できるだろう。博多遺跡群にみられる集散地的な性格は見いただせないが、少なくとも市内では最大の消費地であることは間違いない。立地的な側面を考慮すると、博多遺跡群を補完する役割をはたしていたものと思われる。都市化を推し進める際、中心となったのは、屋敷墓に副葬品とともに埋葬された集団などが考えられる。屋敷墓は10世紀代から継続して遺構が検出される遺跡南東部に多くみられ、次の時期にいたるまで継続して設けられる。以上を考慮すると、遺跡南東部の一帯は一定の拠点的な性格をもっていたと考えられる。

13世紀後半以降も遺跡内の全域に遺構が認められるが、特に遺跡西側緩斜面をより積極的に使用するようになることが明らかになっている。しかしながら、該期に中心となる遺跡西側は調査が進んでおらず、かつ狭隘な調査区が多いため、未だ不明な点が多い。少なくとも、現段階で遺構の検出数が少ないということから、都市としての機能を失ったとするには尚早である。本書で報告する75次調査地点の他、73次調査地点や77次調査地点も西側に位置しており、これらの成果と、今後の調査事例の進展を待って判断しなければならない。

1. 箱崎遺跡
2. 博多遺跡群
3. 鴻臚館跡
4. 堅粕遺跡
5. 吉塚遺跡
6. 吉塚祝町遺跡
7. 吉塚本町遺跡
8. 多々良込田遺跡
9. 多々良遺跡
10. 顯孝寺
11. 香椎 A 遺跡
12. 香椎 B 遺跡
13. 香椎 E 遺跡



※ 図上の一点鎖線は旧海岸線推定線

Fig1 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

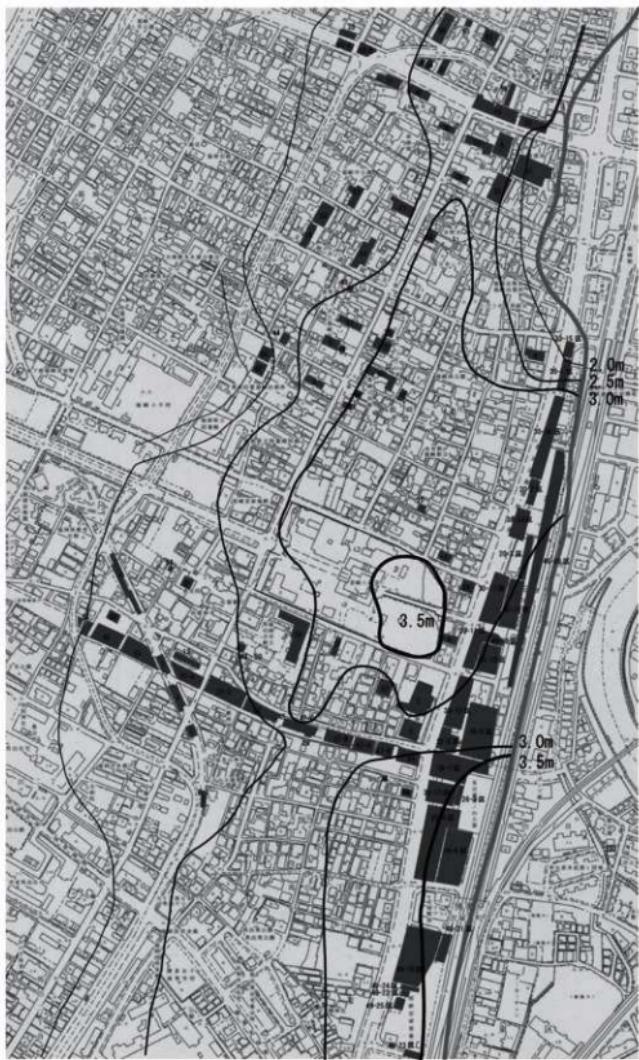


Fig2 箱崎遺跡各調査地点位置図 (1/6,000)

II 第74次調査の記録

1. 調査の概要

第74次調査地点は、箱崎遺跡の南東部、鞍部南側の比較的安定した高所に位置しており、北側には47次調査地点、54次調査地点が、南西には69次調査地点が、東には30次調査地点などが所在する。

本調査では、約80m²の敷地のうちの50m²前後が調査対象面積であったが、近隣住宅が接するため、安全面を考慮し、調査地を若干狭めて設定した。したがって最終的な調査面積は上場面積で37m²、下場面積は安全を考慮して壁面に法面を設けたため20.24m²である。

基本層序はFig4のとおり、地表下約40～60cm前後の1層は擾乱および現代客土であるが、以下の2層～5層には水平堆積層が認められる。5層は遺物を包含しており、この面から掘り込む遺構もあると想定されたが、調査上の制約から遺構は黄橙色砂の地山面上で確認した。地山面の標高は2.5～2.6m前後である。

調査は、2015年4月6日から開始した。廃土置き場や十分な通路を確保するために調査面積は調査区を4分割して調査を実施した。第1区は調査区の東側1/3の範囲で、調査区西側の1/3程度の範囲が第2区である。3区・4区は調査区中央部の1/3が該当する。当初の計画では両者を合わせて1調査区としていたが、表土直下から地山面直上まで大きく擾乱されている部分があり、全部広げて調査を実施すると、壁面が崩落するの危険性があったため、南北でさらに分け、南側を3区、北側を4区とした。1区は上記のとおり6日に開始し、表土除去後、速やかに掘削・記録作業を行い9日に終了し、同日に反転。2区も同様に掘削後、速やかに記録を行い15日に終了。翌16日に反転し、3区の調査を実施。同日中に調査を終え、反転作業を行った。4区の調査も4月17日中に終了し、速やかに埋戻した。その後、機材撤収作業等を行い、4月21日に調査を終了した。

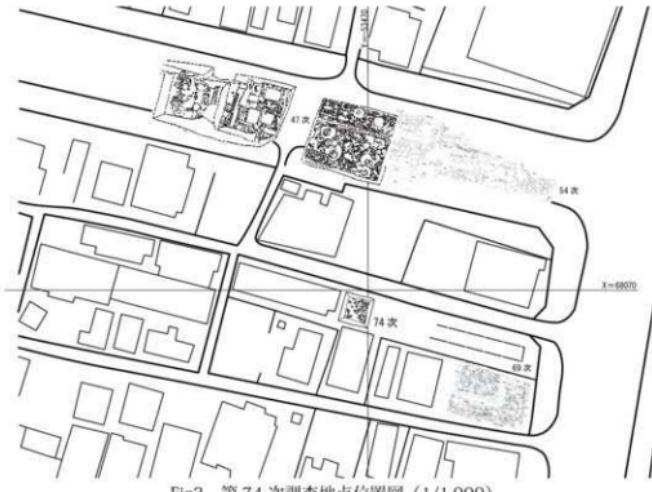
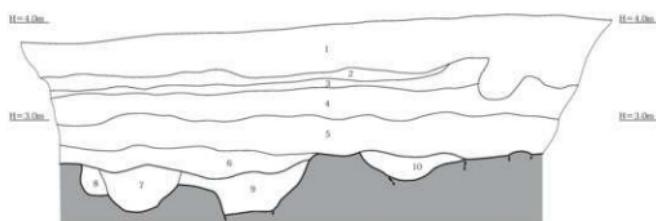
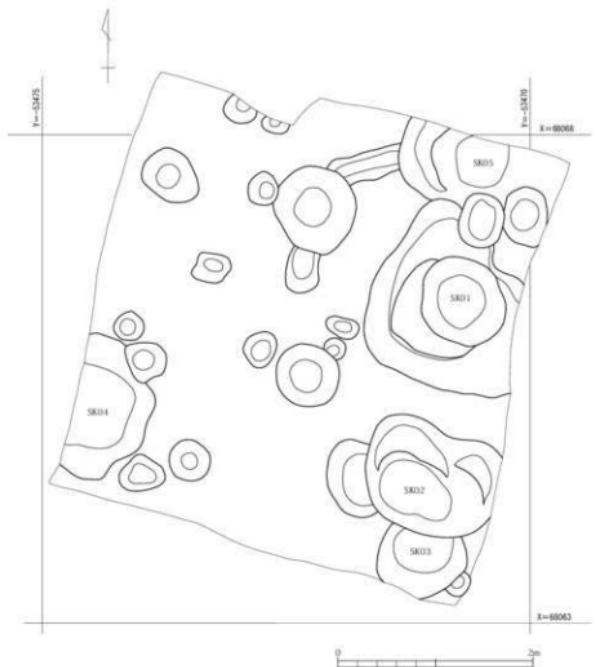


Fig3 第74次調査地点位置図(1/1,000)



- | | |
|-------------------------|---|
| 1. 現代表土・樹皮 | 6. 黒褐色砂質土 (5と相似、但古層もしくは調査区北部遺構の堆土) |
| 2. 黑褐色細砂 | 7. 黒褐色砂質土に暗茶褐色土ブロックをわずかに、黃褐色ブロック多く含む (遺構堆土) |
| 3. 黑褐色砂質土 | 8. 黒褐色砂質土に暗茶褐色土ブロック含む (遺構堆土) |
| 4. 暗茶褐色砂質土 (遺物小片わずかに含む) | 9. 黒褐色砂質土に暗茶褐色土ブロックわずかに含む (遺構堆土) |
| 5. 黑褐色砂質土 | 10. 黃褐色砂質土 |

Fig4 第74次調査遺構配置図および基本層序 (1/50)

2. 遺構と遺物

調査区は下場面積で約20m²と決して広くはないものの、土坑、柱穴を一定数確認した他、混入資料を含む広い時期の遺物が出土している。遺構の時期を示すと判断した遺物以外についても、周囲に該期の遺構が広がる可能性は極めて高く、本報告では図化し得る遺物は混入資料も含めて極力図化すようつとめた。

土坑

土坑は5基確認した。

SK01

調査区北東部で検出した。SK05を切る。平面が不整形の土坑で、遺構中層でテラスを設け、中央部は直に落ち込む。検出当初は井戸と考えていたが、掘方に該当する部分は、最大幅170cm前後で、他の井戸の掘方と比較すると狭く、井筒と考えていた部分も湧水レベルより上部の標高1.5m付近で床面を確認したため土坑と判断した。出土遺物には白磁や土師器がある。

1～4は白磁である。1は玉縁口縁をもつ口縁部片である。2・3は底部片である。いずれも碗IV類で、高台の削りは浅い。4は皿III類で、見込みの釉を輪状に掻き取る。5・6は龍泉窯系青磁碗。いずれも碗I・3a類で、内面に片彫文と櫛描文を施す。7は土師器碗である。ほぼ完形であるが、他の遺物より古相を呈し、混入資料と思われる。8は高台付の环である。9は斜格子タタキ痕を残す平瓦である。調査区の周辺で比較的まとまって出土している。10世紀代前後から12世紀後半にいたる各時期の遺物が混入しており、時期は決定しがたいが、小片も含め12世紀後半以降の遺物がないため、12世紀後半を下限とする遺構である。

SK02

調査区南東部で検出した。SK03を切る。平面は不整形な梢円形を呈し、壁面はゆるやかに立ち上がる。北東側に2段のテラスを設ける。出土遺物には白磁や土師器などがある。

10は玉縁口縁をもつ白磁の口縁片である。11は土師器小皿である。器高1.4cm、復元口径10.8cm、復元底径8.2cm、底部ヘラ切りである。12は土師器丸底杯である。器高3.5cm、復元口径15cm、底部ヘラ切りである。13は滑石製のバレン状石製品である。一部にススが付着している。以上の出土遺物から12世紀前半後に位置付けられる。

SK03

調査区南東部で検出した。SK02に切られる。径は約90cm前後と土坑とするには小さいが、他に検出した柱穴より大きいため、ここでは土坑として挙げている。底面は丸みをもち、壁面はゆるやかに立ち上がる。

14は土師器环である。完形で、器高2.9cm、口径11.9cm、底径は8.6cmを測る。底部の切り離しは回転糸切りによる。15は陶器の耳壺片である。釉薬の色調は灰オリーブ色を呈する。図示した土師器は13世紀中頃～後半を示すがSK02との切り合いから混入資料と思われる。その他の出土遺物が少なく時期は決定しがたいが、SK02に前出するが比較的近い時期の遺構と考えられる。

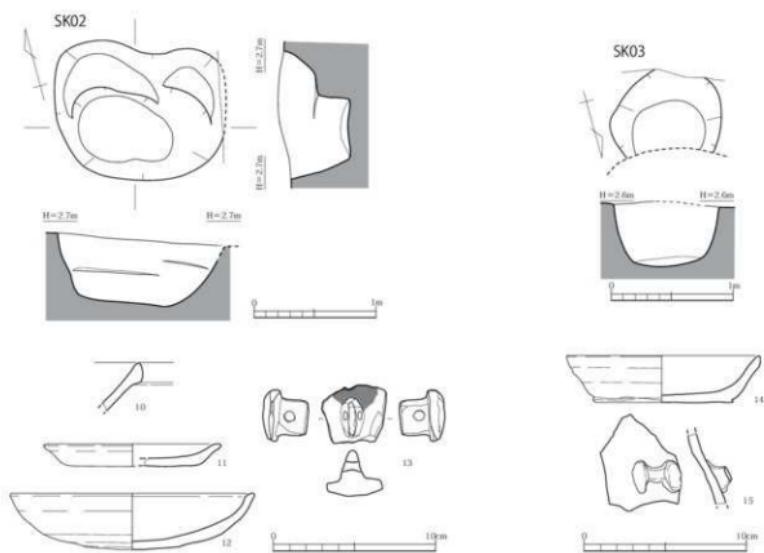
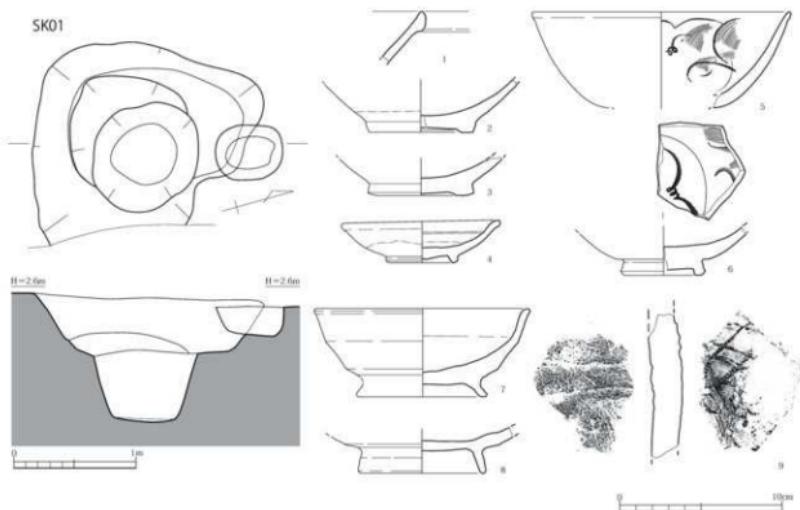


Fig5 SK01・02・03 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

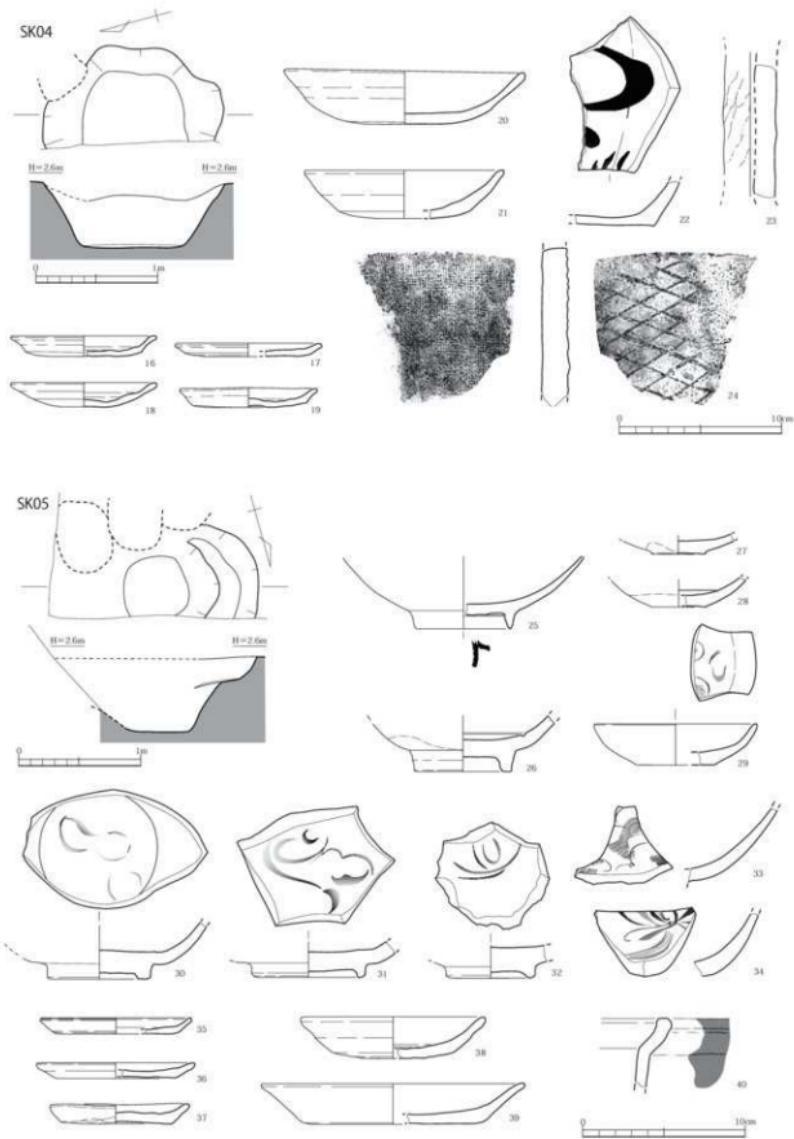


Fig6 SK04・05 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

SK04

調査区南西部で検出した。西半は調査区外に延びるため詳細は不明だが、平面は不整形をなすと考えられる。断面形は台形を呈し、深さ約50cmを測る。

16～19は土師器小皿である。いずれも底部ヘラ切りで、器高は1.1～1.4cm、平均1.3cm、口径8.4～8.8cm、平均8.6cmである。20・21は土師器坏である。いずれも底部ヘラ切り。20は器高3.4cm、口径14.4cm、21は器高3cm、復元口径12cmである。22は黄釉陶器盤である。23は土師質の器台である。24は斜格子のタタキ痕を残す平瓦片である。以上の出土遺物から11世紀後半～12世紀前半に位置付けられる。

SK05

調査区の北東部で検出した。前述したとおり、狹隘な調査区を4分割して調査を実施したため、一度で遺構の全て検出できず、最初に検出した範囲では遺構の肩が確認できなかったため、遺構番号を仮に与え掘削を行い底面を確認するに留まり、中央部の調査を実施した際に遺構の西側プランを確認した。北東部は調査区外に延びるため全容はあきらかではない。深さは約60cmを測る。

25・26は白磁塊である。25は碗V類。底部外面に墨書きを施すが判読不能。27～29は白磁皿。29は皿VII類か。内面に鎧および櫛書きの文様を施す。30～34は龍泉窯系青磁碗である。いずれも1類。30～32は見込みに片彫りによる文様を施す。33・34は内面に片彫りによる花文と櫛描文を施す。35～37は土師器小皿。35・36は底部ヘラ切り。37は底部糸切りである。器高0.9～1.2cm、口径8.6～9.6で、平均は器1.1cm、口径9.1cm。38・39は土師器坏である。38は器高2.6cm、復元口径11.2cm、底部ヘラ切り。39は器高2.4cm、口径16cm、底部糸切り。40は土師器鍋の口縁片。外面上にススが付着している。以上の出土遺物から12世紀中頃～後半に位置付けられる。

その他の出土遺物

ここでは、ピットや包含層から出土した土器を報告する。41～44はピット出土土器である。41は白磁皿である。42・43は土師器小皿。42は器高1.6cm、復元口径9cm、底部ヘラ切りである。43は完形で、器高1.2cm、口径8.5cm、底部ヘラ切りで板目压痕を残す。44は平瓦片で、二重格子のタタキ痕を残す。45～60は包含層出土遺物。45～48は白磁碗、49は白磁皿である。50は龍泉窯系青磁碗1類である。51は土師器高台付の坏である。52は土師器小皿である。器高1.5cm、口径8.4cm底部ヘラ切り。53・54は土師器坏である。53は器高3.1cm、復元口径14cm、底部ヘラ切り。54は器高2.9cm、口径13.8cm、底部糸切り。55は滑石製石鍋である。56は土垂である。57～60は瓦片である。61・62は廃土中採取遺物である。61は白磁塊V類、62は龍泉窯系青磁碗I類である。

3. 小結

遺跡南東部に位置する本調査地点では、遺跡が本格的に都市化をする段階である12世紀代を中心とする遺構を確認することができた。周辺では苔崎宮創建当初の遺構が確認されるが、本調査地点では該期の遺構は未検出である。しかし、混入資料のなかから当時期の遺物を数点確認しており、周囲には該期の遺構が展開する可能性は極めて高い。本調査地点からは墨書き白磁が1点出土している。はじめに述べたとおり、本遺跡の展開と発展には古代末から中世前半期における貿易体制の変革が大きく関与しており、上記の墨書き白磁はそれを示す物質文化の好例であると考えられる。

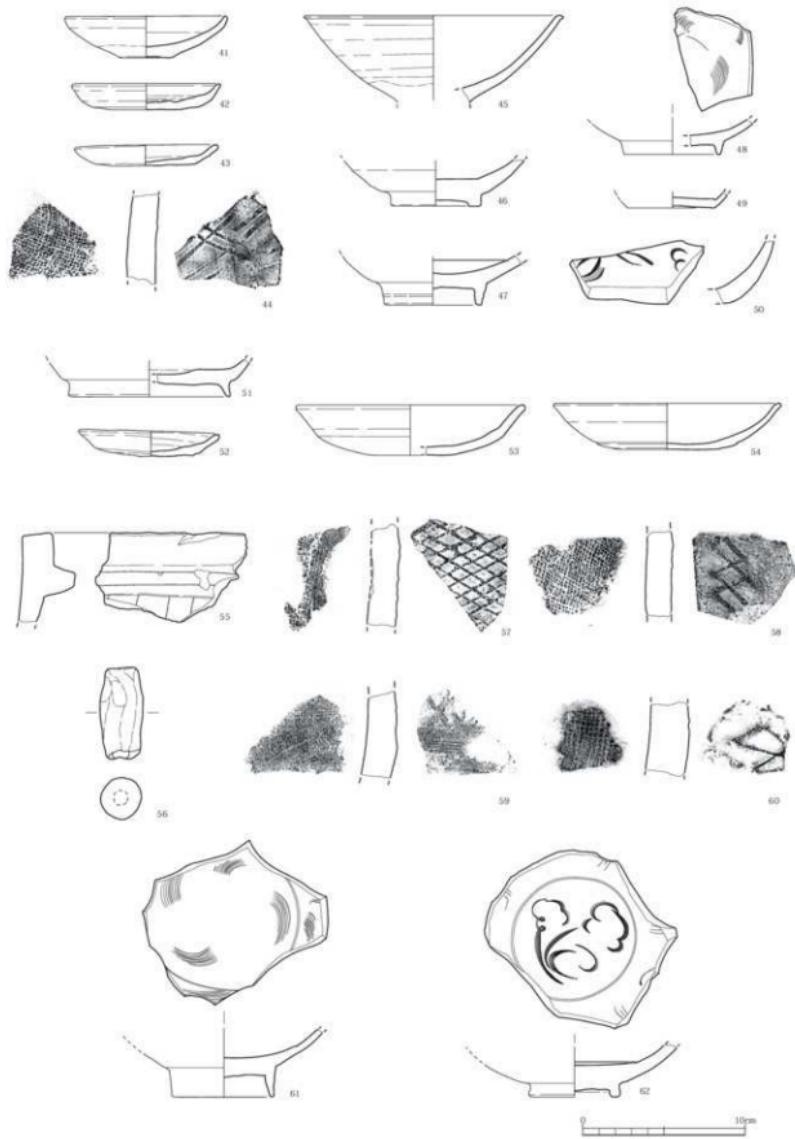


Fig7 その他の出土遺物実測図 (1/3)

III 第75次調査の記録

1. 調査の概要

第75次調査地点は、遺跡中央部や北寄りに位置しており、西および北西側には、3次・5次・16次・63次・66次・73次・77次の各調査地点が所在する。

本調査地点の基本層序はFig9に示した通り、現地表面下、約65～150cmまでは、擾乱および現代客土で、以下に近世の遺物とわずかな遺構を含む包含層が堆積している。その下、標高3m前後に焼土を含む硬化面とこれを掘り込む遺構が多く認められたため、この面を1面と設定した。硬化面の範囲はFig9の1面にアミをかけている部分で確認できた。土層観察から人為的に固められたものであると判明している(14層～19層)。2面の遺構はこの硬化面の下約20～30cm、黄色砂層の地山面に設定し調査を行った。

調査は、2015年5月18日から開始した。廃土置き場の都合上、調査区を南北で2分割し、北側から調査を行った。調査区の東側半分は現地表下3.5～4m前後まで擾乱されていることが分かり、重機で掘削後遺構が認められないことを確認して、埋め戻し、残存する部分の調査を行った。掘削後、順次記録作業を行い、1面の調査を6月1日に終え、上述した硬化面、包含層を人力により掘削。2面の調査は6月5日に終え、8日に反転。第2区も1区同様、東側半分が大きく擾乱されており、遺構がないことを確認し、速やかに埋め戻した。1区同様、1面、2面の調査を順に行い、7月3日に全ての記録作業を完了した、翌7月4日に重機での埋戻し作業を行いつつ、並行して機材の撤収を行い調査を終了した。

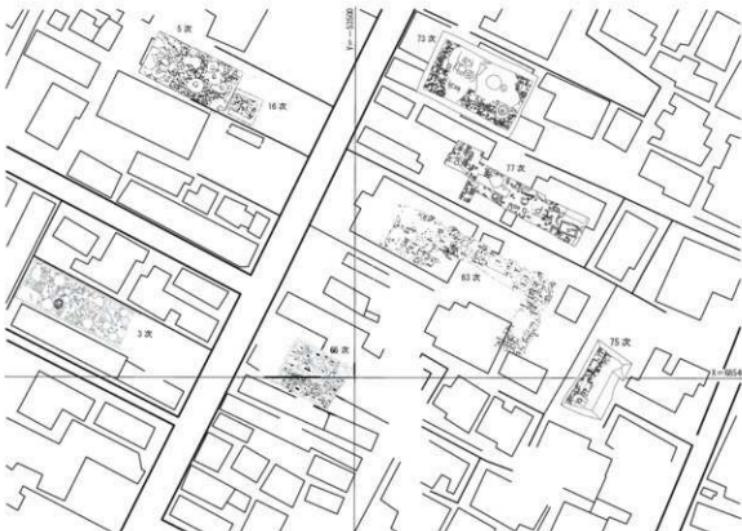




Fig9 第75次調査構造配置図および基本層序(1/100)

2. 遺構と遺物

検出遺構は掘立柱建物、井戸、土坑など。

獨立柱建物

建物としてまとめることができたのは1棟であるが、周囲には同軸上に複数基の柱穴が並んでおり、建て替えなどの可能性も考えられる。

SB11

調査区北西部、1面で検出した。約4.6m×1.8m以上の掘立柱建物である。本建物の南東側と上述した硬化面の検出範囲が重なることから何らかの関連性も想定される。本建物の軸は座標北から約35°東偏し、現在の通りと同軸をとっている。出土遺物には土師器片などがあるが図化し得るものはなかった。

井戸

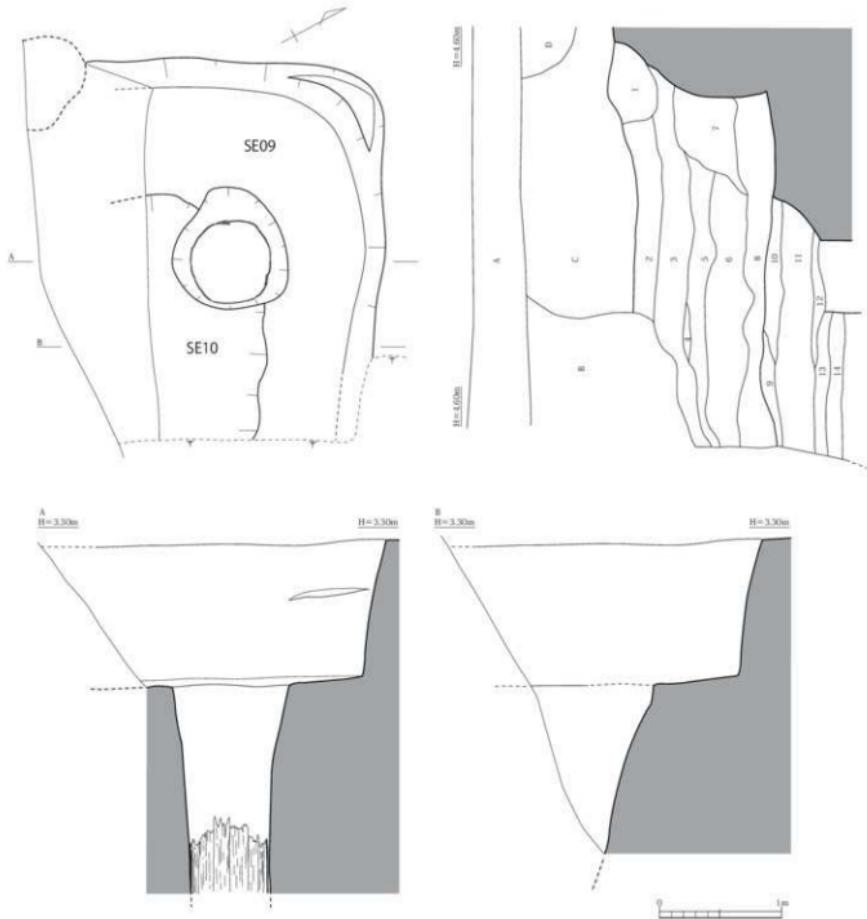
井戸は2基検出した。両者は同一地点で切り合っている。

Fig10 SB11 実測図 (1/60)

SE09 • 10

調査区南部で検出した。SE09 の平面形は比較的整った隅丸方形を呈する。類例がないため、検出当初は井戸と認識できず土層観察のベルトをとり掘削を行っていたが、約 40cm 掘削したところで、井筒にあたる遺構の中央部が円形に陥没したため、井戸であることが分かった。なんらかの要因で井筒下部に空洞があったものが掘削の振動等で落ち込んだものと思われるが、陥没は数十 cm にもおよび、空洞の範囲もこれに比例し大きかったものと思われる。土層観察用のベルトも陥没部にかかっていたため、ベルトを除去したところ、略方形の遺構プランが確認できた。SE09 の掘方が段状をなしているものか、別遺構かの可能性があったが、遺構の南半が調査区外にのびるためにこの段階では判断できず、とりあえずは別遺構として扱うこととし SE10 の遺構番号を付した。その後、SE09 井筒内に落ち込んだ土を除去したところ、井筒の桶の上端が確認されたため湧水点付近まで掘削し記録。別遺構であれば前述した井筒部分の陥没から SE09 が後出する可能性は極めて高かったが、掘方の底面レベルが同時期の他の井戸と比較して高く、SE10 としたものを掘削後、SE09 の井筒底面を出す際、両者が間違いなく別遺構であるのかの確認を行うこととした。本遺構が調査区の壁面際にあるため、安全面を考慮し重機を使用して掘削したが、壁面がくずれてきたため井筒底面まで掘削することは不可と判断し、掘削は中止した。そのため積極的に別遺構とする根拠はみつけることができなかったが、ここでは別遺構として報告している。SE09 からは象嵌青磁や魚骨文タタキをもつ瓦が出土している。SE10 からの出土遺物は土器小片のみである。以下は全て SE09 出土遺物である。

63～69は掘方から出土した。63・64は龍窯系青磁碗である。いずれも碗1類で底部は厚い。63はI-2類で内面に片彫りによる花文を施す。64は見込みに不鮮明な文様を有する。65は青磁である。高台は低く、体部は直に立ち上がり、内面見込みにはわずかな段をもつ。全面施釉後、骨付の



- A～D: 初代杏子・難風
 1: 明灰色砂
 2: 明灰黑色砂
 3: 淡黄色砂
 4: 淡黄色砂に明灰色砂ブロック含む
 5: 淡黄色砂に暗灰色砂ブロック含む
 6: 暗灰色砂
 7: 明灰色砂に淡黄色砂ブロックわずかに含む
 8: 暗灰色砂に淡黄色砂ブロック多く含む
 9: 明黄色砂
 10: 明黄色砂に明灰色砂ブロック含む
 11: 黄色砂に明灰色砂ブロック含む
 12: 暗黄色砂に明灰色砂ブロック含む
 13: 暗黄色砂に暗灰色砂ブロック含む
 14: 暗黄色砂に灰白色砂ブロック含む

Fig11 SE09・10 実測図 (1/40)

釉を削りとる。釉薬は薄く、色調は劣化のためか灰白色を呈する。発色は悪いが、技法、器形から越州窯系青磁碗Ⅰ類であろう。66は高麗後期～末の象嵌青磁の蓋である。外面には象嵌による雨天文を有する。67・68は土師器小皿。いずれも底部糸切りで、67は器高1.4cm、復元口径8cm。68は器高1.2cm、復元口径8.1cm。69は土師器環で、器高2.4cm、復元口径15.2cm、底部糸切り。70～77は下層（井筒内）から出土した。70は高麗末～李朝の象嵌青磁である。いわゆる象嵌青磁から粉青沙器の過渡期的様相をもつ。71～75は土師器小皿である。いずれも底部糸切りで、器高は

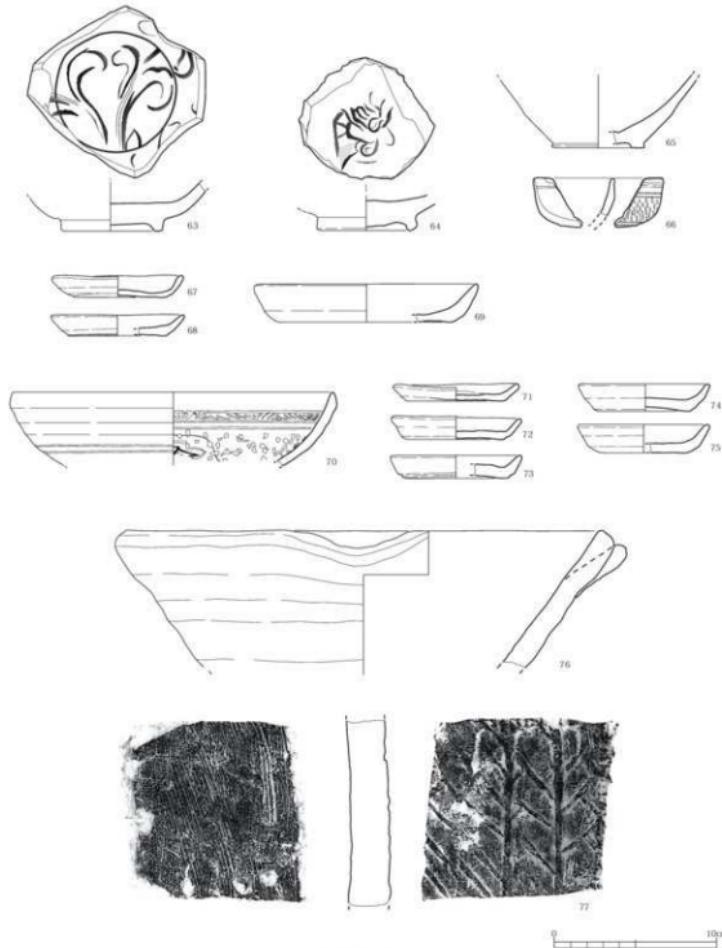


Fig12 SEO9 出土遺物実測図 (1/3)

1.0～1.8cm、口径は7.4～8.0cmで、平均の器高は1.4cm、口径は7.8cmを測る。76は東播系須恵器の片口鉢である。77は平瓦片で、外面に魚骨文状のタタキ目をもつ。この瓦に用いられたタタキ具は高麗に類例があり、本遺構から出土した高麗青磁と合わせて考えると興味深い例である。井筒内から出土した土師器や象嵌青磁から14世紀後半～15世紀前半に位置付けられよう。

土坑

土坑は7基検出した。SK02・07・08からは遺物がまとまって出土している。なお、当初は土坑として遺構番号を付したものと整理の段階でピットに変更したものがあるが、そのまま欠番としている。

SK01

調査区中央部やや北寄り、1面で検出した。攪乱によって南東半が失われている。残存部から平面は径90cm程度の正円に近い円形を呈するものと考えられる。立ち上がりは直であるが、底面付近は若干オーバーハンプし、内傾しながら立ち上がる。床面直上から白磁塊V-4類が出土した他、土師器や陶器が出土している。上記の白磁塊については搬出の最中に他の遺構の遺物と混同してしまったのか現在所在不明である。確認ができる次第、別稿にて報告し、その責を果たしたい。

78・79は白磁塊である。78はいわゆる玉縁口縁の口縁片、79はV類の底部で、高台は高く細い。80は白磁皿である。底部を欠損するため図上で復元した。81は陶器の壺である。白磁碗V-4類から12世紀中頃前後に位置付けられよう。

SK02

調査区西北部、1面で検出した。SK06を切る。やや不整形な方形で深さは約10cm前後残存している。北側を中心に土師器小皿が集中して出土している。遺構検出時土器が集中していたため精査したが、上面では検出できず、わずかに全体を掘り下げた段階で遺構プランを確認することができた。したがって本来の遺構上部レベルは土器出土レベルより高いものと想定される。

82・83は白磁塊である。82はV-4c類で外間に花弁文を内面には櫛描文を施す。83はV類か。84は土師器壺である。器高2.8cm、口径15.9cm、底部ヘラ切りである。85～99は土師器小皿である。85～89は底部ヘラ切り、90～99は底部糸切りである。器高は0.9～1.6cm、口径は8.4～10cmで、

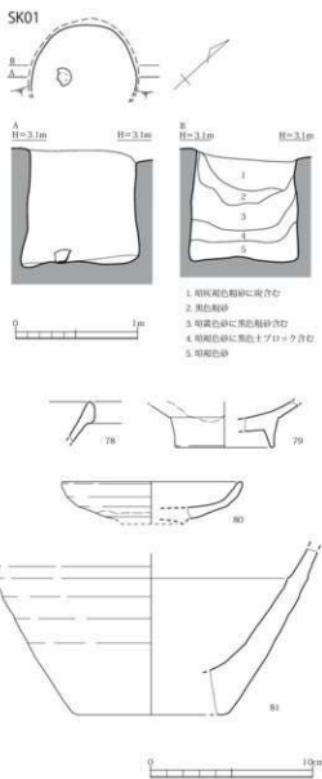


Fig13 SK01 実測図(1/40)
および出土遺物実測図(1/3)

平均の器高は1.2cm、口径は8.9cmである。以上の出土遺物から12世紀中頃～後半の遺構と考えられる。

SK04

調査区北部で検出した。攪乱によって南東半部を切られている。床面直上から瓦器碗が倒置した状態で出土している。

100は白磁塊の底部片で碗IV類か。高台は低く体部は厚い。101は土師器小皿で、器高1.5cm、復元口径9.4cm底部糸切りである。102は瓦器碗である。いわゆる筑前型瓦器碗で、器高4.9cm、復元口径は17.2cm。内面にわずかにミガキの痕跡を残す。以上の出土遺物から12世紀前半～中頃の遺構と考えられる。

SK06

調査区北西部で検出した。南側をSK02に切られ、北側は調査区外に延びる。平面系は不整形で深さは15cm前後残存する。遺物は遺構図に図示した滑石製石鍋の他、白磁や土師器、瓦器碗などが出土している。

103・104は白磁碗の口縁片である。105・106は土師器小皿である。105は器高1.1cm、復元口径9.2cm、底部ヘラ切り。106は器高1.1cm、復元口径7.8cm、底部糸切り。107は土師器環である。器高3.1cm、復元口径15.4cm、底部ヘラ切り。108～112は瓦器碗である。112は外底部にヘラ記号上の線刻を施す。113は瓦片で斜格子タタキ痕を残す。114は土重である。115は滑石製の石鍋である。以上の出土遺物から12世紀中頃前後の遺構であろう。

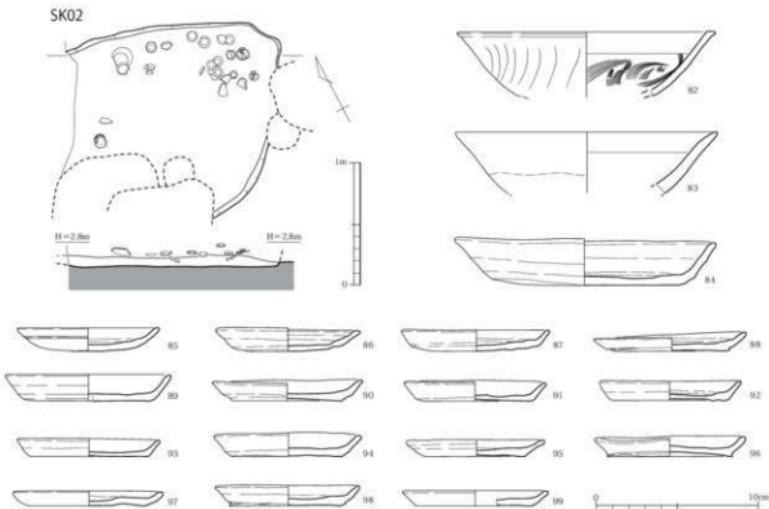


Fig14 SK02 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

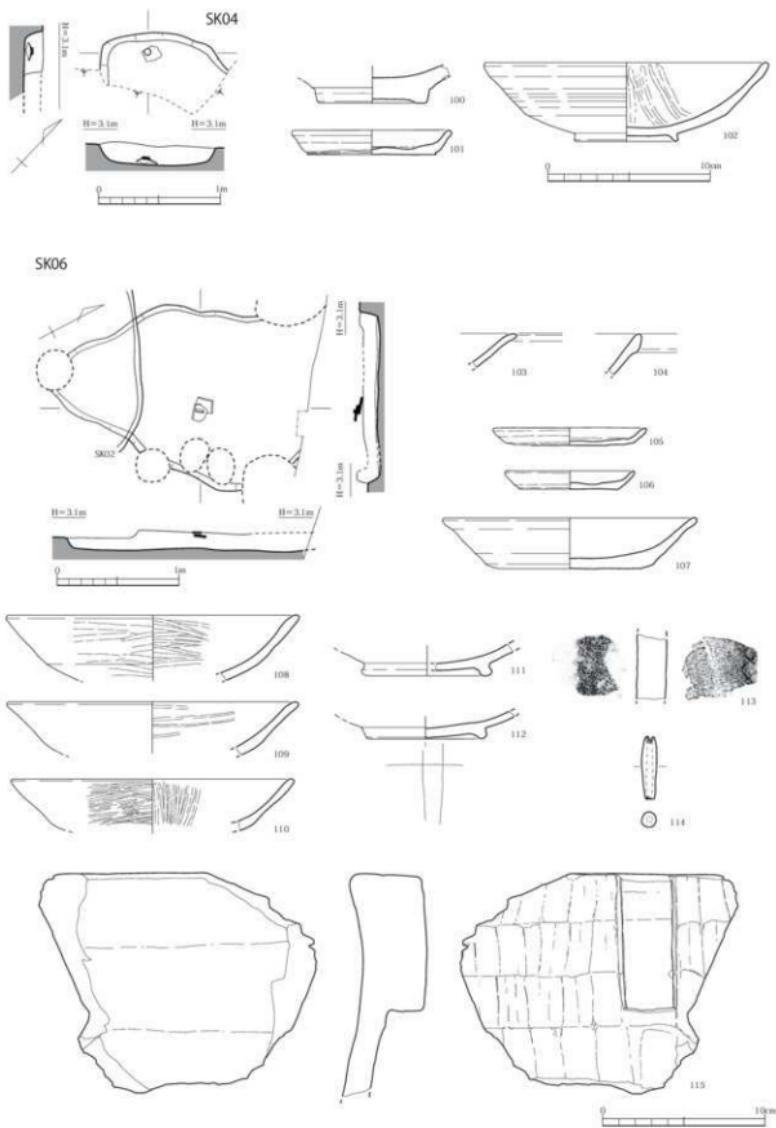


Fig15 SK04・06 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

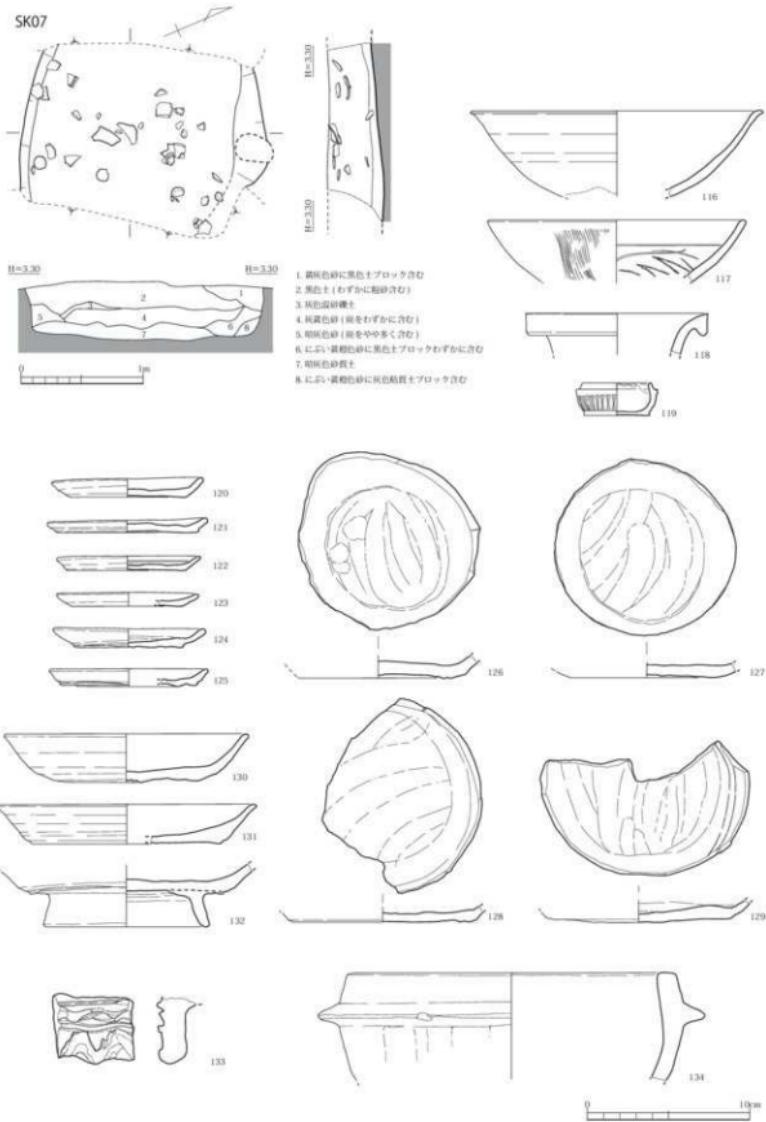


Fig16 SK07 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

SK07

調査区中央やや南寄りで検出した。東西の両端が攪乱および試掘レンチに切られており不明であるが、残存部から略方形を呈するものと考えられる。深さは45cm程度残存しており、以下の遺物が集中して出土している。

116は白磁塊V-4類か。117は同安窯系青磁碗である。118は白磁壺の口縁部である。119は白磁合子身である。120～125は土師器小皿である。120・121が底部ヘラ切り、122～125が底部糸切りである。124・125は板目圧痕を残す。器高0.9～1.2cm、口径8.6～9.8cmで、平均は器高が1.1cm、口径が9.2cmである。126～131は土師器壺である。126～129は口縁部を丁寧に打ち欠く。いずれも回転糸切りで127～131は板目圧痕を残す。130は器高3cm、復元口径14.8cm。131は器高2.4cm、復元口径15.6cmである。132は土師器高台付壺である。高台の貼りつけは雑で接合痕が明瞭に残る。133は押圧波状文平軒瓦片である。134は滑石製石鍋である。以上の出土遺物より12世紀中頃前後に位置付けられる。

SK08

調査区中央やや西寄りで検出した。南東側を試掘レンチによって、北西側を柱穴によって切られる。SK02同様遺構検出次に土師器が集中して出土していることが分かり遺構のプランを確認した。北東側はプランがはっきりと確認できたものの、北西側と南西側は上面では確認できなかった。これを切る柱穴を記録した後、ベルト部分を慎重に一段づつ掘削したが、遺構のプランは確認できなかつ

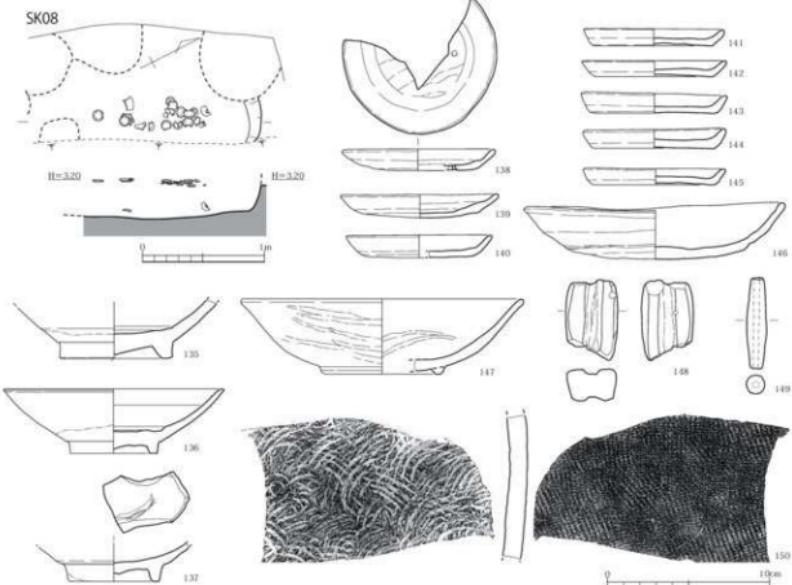


Fig17 SK08 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

た。したがって、調査区外にひろがると判断したが、土器の出土状況から、本来あった遺構のラインを識別できずに掘削してしまった可能性もある。なお、土器は遺構上層に集中するため、土坑が埋没する最終段階に一括して投棄されたものと想定される。

135・136は白磁塊である。135はIV類で高台は低く体部は厚い。136はVII類で見込みの釉を輪状に掻き取る。137は高麗青磁碗である。量産された粗雑品で、重ね焼きの際の目跡を残す。胎土は悪く釉は発色が悪く不透明である。138～145は土師器小皿である。138～140は底部ヘラ切りでいずれも板目压痕を残し、141～145は底部糸切りである。138は底部に穿孔を施す。器高は1.0～1.4cm、口径は8.4～9.7cmで、平均は器高1.2cm、口径8.8cmである。146は土師器丸底杯で、器高3.3cm、口径16cm、底部ヘラ切り。147は筑前型瓦器碗である。148は滑石製石垂、149は土垂である。150は東播系須恵器の胴部片か。以上の出土遺物から12世紀中頃前後に位置付けられる。

SK12

本遺構からは白磁が集中して出土している。はじめに述べたとおり、調査は北東と南西に2分割して実施しており、両調査区を重複する形で反転作業を行った。本遺構は両者の境に位置しており、第1区2面のSP52周辺を清掃する際、1区の南壁から白磁が複数点露出していることが分かった。壁面には十分な法面をつけていたが、豪雨などの影響もあり一部の土器が落ちかかっていたため、露出していた分の土器は先に取り上げ、遺構のプランは調査区反転後、2区の1面で検出した。本遺構

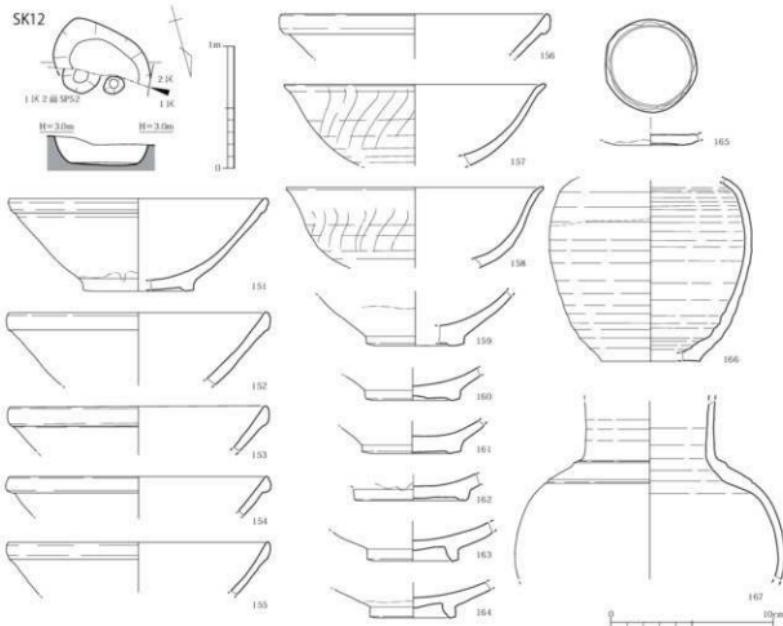


Fig.18 SK12 実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

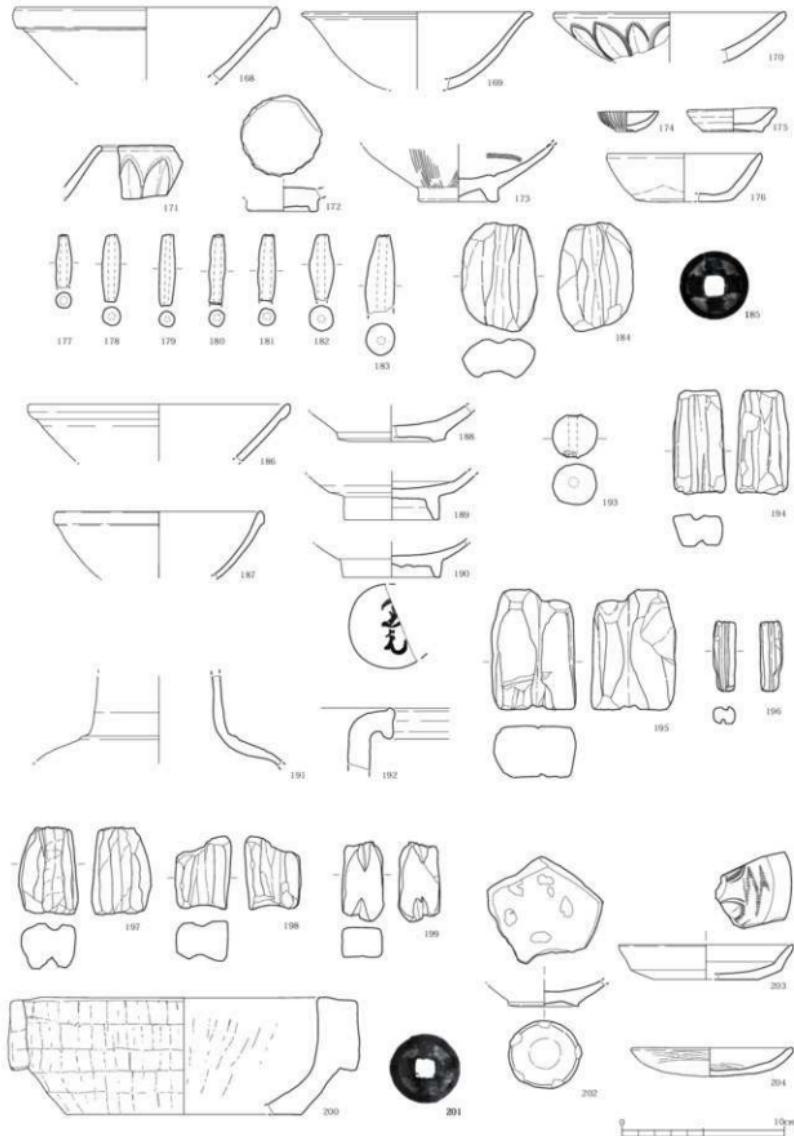


Fig19 その他の出土遺物実測図 (1/3)

からも白磁が出土しており、白磁が位置関係から先に取り上げた白磁も本遺構に伴う可能性は強い。遺構は北側も残存していた可能性は極めて強いが、1区検出の段階では見落としてしまったものと思われる。記録はできなかったが遺物の出土地点は記録しており。上記の遺物が同一地点で出土したことに変わりはなく、状況から判断して白磁中心とした陶磁器類を一括で投棄もしくは埋納したものだろう。なお以下に図示したもの以外にも破片から複数点の別個体があることは確実である。

151～164は白磁碗である。151～158は体部～口縁部片である。151は碗IV類、152～156もIV類か。157・158は碗V類である。159～164は底部片である。159～162は碗IV類か。165は白磁皿である。体部を丁寧に打ち欠く。166は陶器壺か。167は青磁の壺である。白磁以外の遺物も含まれているが、適切に記録できなかったため、混入資料かどうかの判断はつかない。遺構の時期は白磁が示す11世紀後半～12世紀前半であろう。

その他の出土遺物

ここでは、柱穴、包含層、および遺構検出時の出土遺物まとめ報告する。168～185は1面遺構検出時の出土遺物である。168・169は白磁塊である。168は厚い玉縁口縁をもつ。碗IV類か。169は碗V類。170は龍泉窯系浅型碗II類である。体部外面に鍋蓮弁を有する。171は龍泉窯系青磁碗II類で、体部外面に鍋蓮弁を有する。172は青磁小型碗である。龍泉窯系か。体部を丁寧に打ち欠く。173は同安窯系青磁碗である。174は紅皿である。175は土師器小皿。器高1.4cm、口径5.4cm、底部切り離しは糸切りによる。176は褐釉陶器の环である。黒褐色の釉が体部上半まで施釉される。胎土は精良で色調は灰色を呈する。177～183は土垂である。184は滑石製の石錘である。185は銅錢「天聖元寶」である。初鋤は1023年。186～196は1面下包含層出土遺物である。186～190は白磁である。186・187は口縁片でいずれも玉縁口縁である。188～190は底部片である。190には底部外面に「金□」の墨書を施す。191は白磁の壺もしくは水注。192は常滑焼の口縁片である。193は土垂である。194～196は滑石製の石錘である。197～201はピット出土遺物である。197～199は滑石製の石錘である。199は石錘の耳部分を転用している。200は滑石製石錘である。201は銅錢「皇宋通寶」である。初鋤は1038年。202～204は壁面出土土器である。202は李朝の灰青陶器碗である。底部外表面に目跡を残す。203は同安窯系青磁皿である。204は瓦器質の环である。

3. 小結

75次調査地点は遺跡中央やや西寄りに位置する。一帯から西にかけては、12世紀中頃以降遺構が増加するとされているが、本調査地点でもSK07やSK08などはこの時期に帰属するものと考えられ、遺物の出土状況や周囲の状況から活発な土地利用を考えることができる。また、それに遡る11世紀後半～12世紀前半の遺構も検出している。特にSK12は上述した理由で遺構プランを明確にすることことができなかったが、白磁複数点がまとまって出土する特殊な遺構と推定され、遺跡内では重ねて倒置された状況で出土した51次調査以外に類例をみない。これらの遺構から12世紀中頃をまたず周囲には生活遺構が広がっていた可能性は強いと考えられる。また、本調査地点からは14世紀～15世紀と考えられるSE09も確認している。この時期の遺構は遺跡全体でみても少ないとから、遺跡の規模が縮小した感があり、都市的な機能が消失したとも捉えられかねないが、SE09から出土した高麗～李朝の陶磁器が示すように継続した都市機能はあったものと考えおきたい。中世後半期については、周辺の調査の進展をまって判断する必要があるだろう。

IV 結語

本報告書では、遺跡南東部に位置する第74次調査地点、および遺跡中央部に位置する第75次調査とそれぞれ地点が異なる2地点の報告を行った。最後に既往の調査成果と上記の2地点の成果をあわせ遺跡全体を概観してまとめたい。

はじめに述べたとおり、箱崎遺跡は菅崎宮が創建された10世紀前半以降、中世を通して生活遺構が継続して営まれている。10世紀代から11世紀前半にかけては、74次調査地点が位置する遺跡南東部の限られた範囲でのみ生活遺構が認められる。砂丘鞍部のあり方などから当初は港湾施設として機能していた可能性が考えられ、周囲からは越州窯系青磁碗を典型とする特殊遺物や古代の瓦も出土しており、官的な様相が伺える。74次調査地点においても斜格子タタキ目をもつ瓦片が複数点出土している。南東部一帯は以降も中心として継続することは、後述するように副葬品をもつ屋敷地内埋葬の集中および同一地点での継続から推察することができる。

11世紀後半から12世紀前半にかけては、遺跡の東側緩斜面を中心にして遺構が拡大するとされてきた。75次調査地点は砂丘尾根線のやや西側に位置するが、まとめて述べたように該期の遺構が検出されている。1面の遺構にはSB11など整地層と思われる硬化面上から掘り込んでいるものがあるが、11世紀後半～12世紀前半のSK12は、硬化面の分布状況から本来は硬化面を掘り込んでいたものと思われる。このことから75次調査地点周囲は12世紀前半までには砂丘上を整地し、生活面を確保していた可能性が考えられる。北側に位置する73次調査においても同時期の遺構が確認されており、生活遺構は早い段階で遺跡の全体に広がっていた可能性も指摘できよう。

この時期に関して注目すべきは75次調査地点以北における遺物、遺構の分布傾向である。75次調査で出土した墨書陶器は遺跡南東部よりむしろ北西部に集中しており、51次調査では本時期の指標となる白磁を含む各墨書陶器が20点以上出土している。74次調査地点を含む遺跡南東部でも出土はみられるが、他の遺物のようなまとまりをみない。75次調査SK12はこのなかで捉えると極めて重要な成果といえよう。また、埋葬形態にも差異が現れている。北西部に位置する21次調査地点では、若干時期が下る12世紀中頃前後の土坑墓が5基検出されている。埋葬施設は上記の南東部と北西部の2地点で多く確認されており、両者の検出数に大差はない。しかし、南東部に位置する22次調査地点や26次調査地点では12世紀前半～中頃以降、各時期に1基ないしは2基が営まれ、比較的長期間継続するのに対し、21次調査地点の5基は極めて近い場所に同時期もしくは近い時期のものが設けられ、以降断絶するという違いが認められる。屋敷地内埋葬はいわば在地的な要素をもつ埋葬形態であるが、これの一時的な採用と墨書陶器の集中傾向は注目すべきで、これを集團差であると即断することはできないものの、今後の調査、研究で重視すべき課題であるといえよう。

報告した両調査地点でも多くの遺構が検出された12世紀中頃～13世紀前半は、井戸の検出比率から推測される人口集中や生産関連遺物から都市と考えることができる。一方で、10世紀以降周辺の中心であった南東部とその他では、屋敷墓の継続こそ認められるが、それまで南東部に分布していた方形堅穴状遺構が消失するなど遺構有り方や密度に関して特段の違いが認められなくなる。これは都市として成長するなかで南東部の集團の役割が変質していった結果であろう。

中世後半期に関しては、未だ不明な点が多いが、韓国新安沖沈没船出土の「菅崎宮」銘木簡から都市機能が継続した可能性は極めて強く、75次調査SE09出土の高麗～李朝の陶磁器や高麗に類例をもつ瓦の出土はその根拠のひとつにもなり得るだろう。13世紀以降になると西側緩斜面における積極的な土地利用が想定されており、今後の調査では本時期の遺構・遺物特に注意する必要がある。

PL1



(1) 第 74 次調査 1 区 1 面全景 (北東から)



(2) 第 74 次調査 2 区全景 (北東から)



(3) 第 74 次調査 3 区全景 (北東から)



(4) 第 74 次調査 4 区全景 (北東から)



(5) 第 74 次 SK01 出土遺物 (7)



(6) 第 74 次 SK02 出土遺物 (13)



(7) 第 74 次 SK04 出土遺物 (22)



(8) 第 74 次 SK05 出土遺物 (25)



(1) 第75次調査1区1面全景(南東から)



(2) 第75次調査1区2面全景(南東から)



(3) 第75次調査2区1面全景(北東から)



(4) 第75次調査2区2面全景(北東から)



(5) 第75次SKO1遺物出土状況(南東から)



(6) 第75次SKO2遺物出土状況(北西から)



(7) 第75次SKO6遺物出土状況(北から)



(8) 第75次SKO7遺物出土状況(南東から)

PL3



(1) 第75次SK08出土遺物出土状況(西から)



(2) 第75次1面下硬化面検出状況(南西から)



(3) 第75次SEO9出土遺物(70)



(4) 第75次SEO9出土遺物(77)



(5) 第75次SK07出土遺物(133)



(6) 第75次1面下包含層出土遺物(190)

報告書抄録

ふりがな	はこざき 50
書名	箱崎 50
副書名	箱崎遺跡第 74 次・75 次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1317 集
編著者名	中尾 祐太
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 Tel 092-711-4667
発行年月日	2017 年 3 月 27 日

ふりがな 所収跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
		市町村	道路番号	° ° °				
ほこぎだくわくせいじや47号 船崎道路第74次	あいのまちひやくわくせいじや47号(船崎) 福岡市東区船崎4丁目10番1	40131	2639	33°36'44"	130°25'25"	2015.4.6 ~ 2015.4.21	37	記録保存調査
ふりがな 所収跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
ほこぎだくわくせいじや75号 船崎道路第75次	あいのまちひやくわくせいじや75号(船崎) 福岡市東区1丁目20番1, 20番2番3, 20番4番, 20番5番, 20番6番, 27番番4番	40131	2639	33°41'66"	130°42'40"	2015.5.18 ~ 2015.7.4	136	記録保存調査

所収道路名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡第74次	集落	中世	土塁、柱穴	中国陶磁器、土器類、瓦	
所収道路名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡第75次	集落	中世	圓筒状建築物、井戸、土塙	中国陶磁器、福建青白釉 土器類、瓦	

第74次調査地点では遺跡最盛期の12世紀代を中心とした遺構、遺物が出土している。また高麗宮創建当初の遺物も混入資料として出土しており、周間に該期の遺構が展開していた可能性が高い。

要約

第75次調査地点でも12世紀中頃～後半を中心とした遺構を検出したが、11世紀後半～12世紀前半にかけての土坑および14世紀後半～15世紀の井戸を確認している。前者からは白磁がまとめて出土しており、後者は、高麗宮の遺物が複数出土している。以上の遺物や遺構は貿易都場などを補完する都城遺跡としての性格を顯著に示す握であるといえよう。

箱崎遺跡 50

— 箱崎遺跡第74次・75次調査報告 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1317集

2017(平成29年)年3月27日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 株式会社 ソウヤマ印刷
福岡市博多区中呉服町10-5
